〔千葉医学 61, 229～233, 1985〕

〔学会〕

第710回　千葉医学会例会
第5回　歯科口腔外科例会

日　時　昭和59年10月27日（土）
場　所　千葉大学医学部附属病院第2講堂

1. 下顎遊離端骨移植ならびに関節頭温存架橋移植の予後の比較検討

高橋喜久雄，小林　操，武藤寿孝，
花沢　康雄　（千大）
額賀　康之，金沢正昭，堀越達郎
（東日本学園大・歯・口外）

当科にて施行した自家腸骨移植による下顎骨再建例のうち，架橋移植15例，遊離端移植5例について，予後を比較検討した。顎の変位，遊離端移植では全例に患側方向への偏位がみられ，その平均値も架橋移植に比して高かった。移植側の機能回復は両側咬筋の筋電図上の比較も含め，架橋移植の方が良好であった。しかし架橋移植例でも，関節頭が関節窩より遊離した例においては，顎の機能不全，審美障害がみられた。以上から，下顎骨再建において，移植側顎関節部の機能的回復の程度が，予後に少なからず影響を与えると思われた。

2. 実験ラット骨肉腫細胞の特性

秋山行弘，磯貝嘉伸，金沢春幸（千大）

^{32}P 誘発ラット骨肉腫5代目を用い組織培養を試み，継代可能な培養細胞を得たので，その生物学的検索を行い次の結果を得た。① 細胞は紡錘形で，継代24代現在変化なく，増殖速度も一定していた。② 単離細胞培養により colony 形成能を有した。③ 骨形成能の指標となる細胞内 ALP 値が有意に高い値を示した。④ 培養細胞の戻し移植により原腫瘍と同じ類骨形成を併う骨肉腫像を呈した。以上により，本培養細胞を，ラット骨肉腫由来と同定した。

3. 実験骨肉腫 A_3 の移植性について

内山　聡，京田直人，花沢康雄，
武藤寿孝　（千大）

当教室，武藤により4-NQO，^{32}P によって誘発した骨肉腫について同種継代移植（in vivo）を行ない，この中より継代移植10代を経過した骨肉種 A_3 について背部皮下移植群，下肢筋肉内移植群，大腿骨骨髄内移植群について生物学的，レ線学的，組織学的変化の追及を行なった結果，どの群でも最終代まで Osteoid の形成が認められたが，その中でも背部皮下移植群が移植率が高く比較的腫瘍の発育速度が一定で骨腫瘍のモデルと成り得るのではないかと考えた。

4. NMR-CT の口腔腫瘍診断の可能性

林　逸子，熱田藤雄，土屋晴仁，
今井　裕　（千大）

我々は NMR-CT を応用する機会を得たので，その概要を報告した。すなわち，NMR-CT では従来のX線—CT と比較し，多次元的な情報が得られ解剖学的局在の把握が可能であり，特に軟組織の描出能が優れていた。しかし，口腔領域はその範囲が狭く，身体的部に比し病変部を得るのに困難性があると共に，金属性補綴物により付近軟組織の詳細をぼかせるアーチファクトを生じる欠点を有した。

5. 当科過去10年（昭和48年～57年）の唇顎口蓋裂手術症例の全身麻酔における統計的観察

熱田藤雄，大木保秀，尹　錫哲，
木村孝雪，石山信之　（千大）

過去10年間に，全身麻酔下に施行した，第1次口唇形成術69例，第1次口蓋形成術96例，咽頭弁形成術43例，修正手術75例計283例に関し，手術時年齢分布，術前合併症，前投薬，麻酔導入法，挿管法，麻酔及び手術時間，出血量と輸血，麻酔時合併症，術後合併症について検討した。その結果 GOF 麻酔と epinephrine 5 μg/kg 以下の併用では，重篤な不整脈を認めなかった。術後呼吸器系合併症は，口蓋形成術施行例と挿管トラブル症例に多く認められた。